

10. 総括

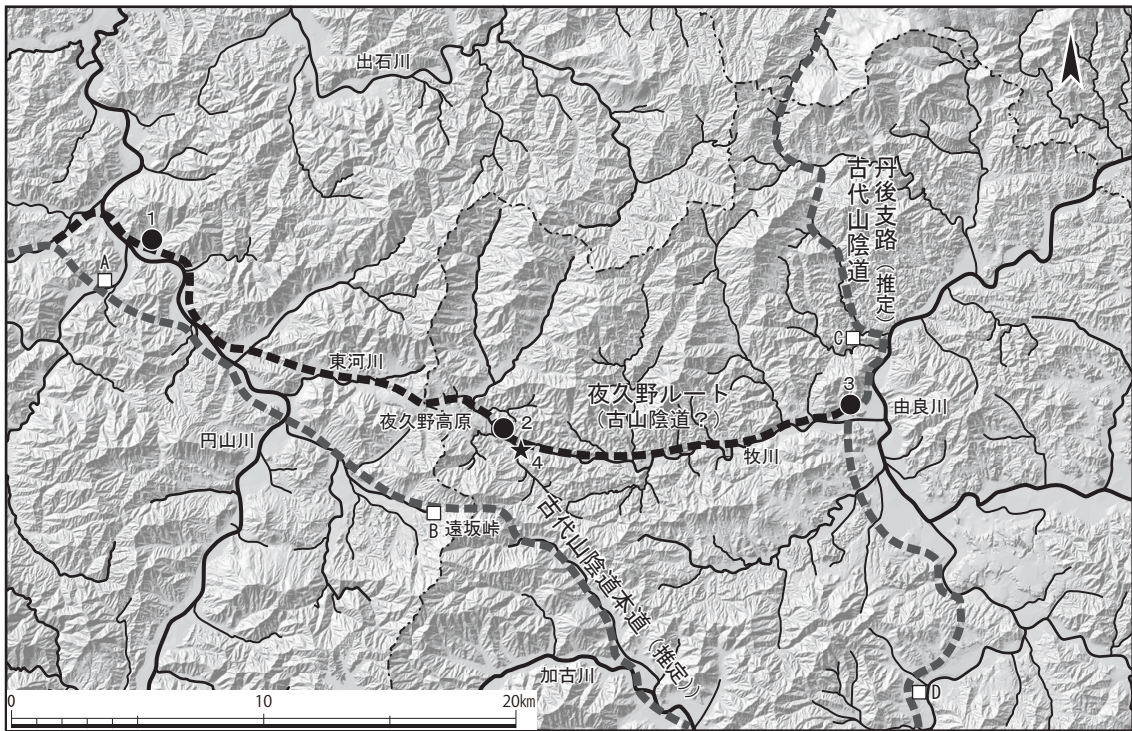
1. 夜久野地域における古墳築造とその背景

福知山市西部（旧丹波国天田郡西部）に位置する夜久野地域における古墳の動向については、夜久野町史編さんの際にその概要について基礎的な整理がなされ（前田2006）、周辺地域の古墳築造の動向をふまえた評価がなされている（菱田2013）。ここからはそれらをふまえつつ、今回の調査成果をもとに、夜久野地域における古墳の盛衰とその背景について改めて考えてみることで総括に代えたい。

（1）夜久野地域における古墳の出現と夜久野ルートの開削

夜久野地域は、古墳時代中期以前に遡る古墳の存在が明確でなく、前方後円墳も確認されていない。現在確認されている80基近い古墳の多くは古墳時代後期から飛鳥時代（古墳時代終末期）にかけての横穴式石室墳とみられる。これまで知られる資料による限り、最も古い古墳は6世紀前葉（TK10型式期）に位置づけられ、竪穴系横口式石室を主体部とする上夜久野（夜久野町平野）の流尾古墳であるが、その直後の6世紀第3四半期（MT85型式期）には中夜久野（夜久野町高内）に長者森古墳が築造されていることが、今回の調査により石室形態だけでなく出土遺物からも裏付けられた。両者は直線距離で約1.9kmしか離れておらず、牧川中流域に相次いで築かれた両古墳の築造背景については、一連の脈絡の中で理解するのが妥当である。その脈絡とは、すでに指摘されているように古墳時代後期に入って、両古墳の眼下を流れる牧川流域、およびその西方に広がる夜久野高原がもつ交通上の重要性がにわかに高まったことに求められるのであろう（菱田2013）。夜久野地域の東西には東方に由良川、西方に円山川という京都府と兵庫県の日本海側を代表する河川が、それぞれ南から北へ向かって流れているが、夜久野地域の東西（福知山市牧付近と朝来市和田山付近）でそれぞれ夜久野方向に向かって大きく蛇行し、両河川の間隔が最も狭まっていることがわかる。低平な分水嶺（峠）によって瀬戸内海側の大河川（前者は桂川（淀川）水系、後者は市川水系や加古川水系）と接続し、古墳時代以前から日本海側と瀬戸内海側を結ぶ主要な南北幹線ルートであったとみられる両河川間を直線距離23kmで結ぶ、この「夜久野ルート」とでも呼ぶべき東西陸上交通路は、水運を基本とする南北幹線ルートを最短距離で結ぶ、現代でいうところのバイパス路といってよいだろう（図1）。両古墳の被葬者集団はそのルート開削に深く関わり、維持・管理の実務を担った新興勢力とみられる。

ただ、以上のような交通上の利点を強調するだけでは、その開削がなぜ6世紀半ばを待たねばならなかったのか、十分な説明がつかない。上夜久野（夜久野町平野）の茶堂遺跡や下夜久野（夜久野町井田）の稲泉遺跡では古墳時代中期、布留式併行の土師器が採集されており、夜久野地域がもつ交通上の利点は古墳時代後期以前から認識されていたであろうし、実際に利用されていたに違いない。それが古墳築造に象徴されるこの地域自体の発展と直接結びつかなかった第一の理由は、京都府唯一の



1. 大敷古墳群 2. 長者森古墳 3. 牧古墳群 4. 末窯跡群
A. 郡部駅 (推定) B. 栗鹿駅 (柴遺跡) C. 花浪駅 (推定) D. 日出駅 (推定)

図1 夜久野ルートの復元 (S=1/300000)

火山、田倉山（標高349.7m）の噴出物によって形成された標高160～210m、東西4.5km、南北1kmに及ぶ溶岩台地である夜久野高原（夜久野ヶ原）の存在に求められるのだろう（第I部3章参照）。標高約15mの福知山市牧付近、標高約70mの朝来市和田山付近と夜久野高原の間の最大200m近い比高は、人の往来に支障がなかったとしても、人担（徒歩）による物流においては、直線距離とは裏腹に非効率なルートであったに違いない。

物資輸送の面ではハイコストであったとみられるこの高原越えルートが、現在も国道9号線やJR山陰本線が走る内陸幹線ルートの一つへと大きく転換する契機として、筆者は古墳時代中期に本格的に渡来し、日本列島の広範な地域に家畜として広まっていった馬に注目している（諫早2021）。馬であれば多少のアップダウンがあっても、人間を乗せて高速で移動することはもちろん、人間よりはるかに重たい荷物を載せたり、曳いたりすることができる。夜久野地域最初の首長墳とみられる長者森古墳に、夜久野地域において現状最古の馬具が副葬されているという事実は、夜久野地域における巨大な横穴式石室墳の築造と陸上交通路の開削、そして家畜馬利用の開始の間に、有機的な関係があったことを示す何よりも証拠であろう。

なお、流尾古墳や長者森古墳の付近で6世紀代に遡る集落遺跡はみつかっていないが、中夜久野の荒堀遺跡（夜久野町大油子）や高内鎌谷遺跡（夜久野町高内）では、7世紀前半の竈を伴う竪穴住居がみつかっており、後者では7世紀後半以降、掘立柱建物へと移行することも明らかとなっている（菱田2013）。夜久野地域の中でも牧川が北から東へ大きく流れを変える牧川中流域、夜久野高原の東麓付近（夜久野町平野・小倉・大油子・高内）に、流尾古墳や長者森古墳をはじめとする古墳が

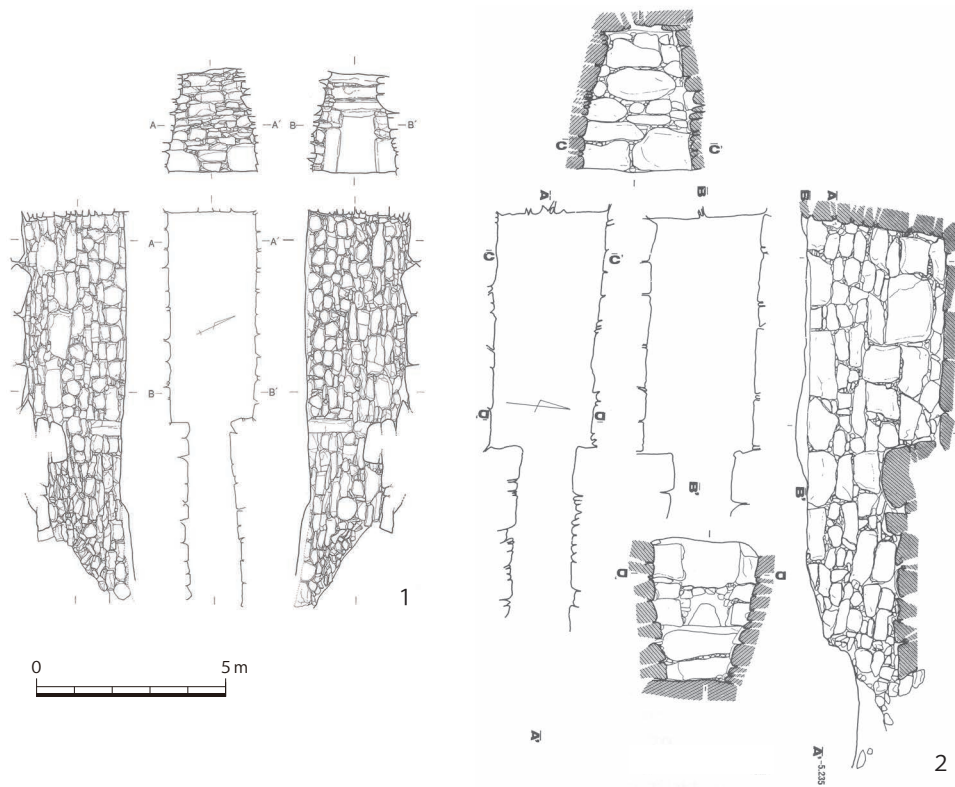


図2 長者森古墳（1）禁裡塚古墳（2）の横穴式石室（S=1/200）

集中して分布することからみて、一帯には夜久野ルート¹の維持・管理を担った拠点的な集落や施設が存在した可能性が高く、その出現時期は夜久野ルートの開削された6世紀半ばにまで遡るのであろう。一帯の地形からみてここは、由良川流域と円山川流域を東西に結ぶだけでなく、牧川（直見川）を北へ遡って、出石川流域（兵庫県豊岡市但東町）の東西交通路と繋がり、さらに峠を越えて佐濃谷川流域（京都府京丹後市久美浜町）によって日本海へと至る南北方向の交通路との結節点であった可能性もある。

夜久野ルートの開削に伴って「この地域に打ち込まれた楔のような位置づけ」（菱田2013：62）を与えられ、「交通の要衝を把握する有力者」（菱田2013：50）であった彼ら・彼女らの出自については、流尾古墳の竪穴系横口式石室の類例が離山古墳（京丹後市網野町）など丹後地域に、楣石をもつ長者森古墳の横穴式石室が「畿内型石室」そのものではなく、近隣ではほぼ同時期に築造されたとみられる禁裡塚古墳（養父市大藪）や両者に後続するとみられる見長大歳神社古墳（丹波市柏原町）などにみられることから（高松2007）、倭王権中枢からの直接的な人の流れを想定することは難しい（図2）。

ただし、家畜馬利用を前提とする陸上交通路自体は、馬が本格的に渡来した5世紀代から段階的に整備されていったとみられ（諫早2021）、古墳時代後期の大型横穴式石室墳の立地とのちに敷設された古代官道のルートが重なることも指摘されている（広瀬2013、菱田2020など）。そのような視点で夜久野地域の周辺を改めて見わたすと、長者森古墳から直線距離で西方約15kmの円山川中流域には上述の禁裡塚古墳を嚆矢とする大藪古墳群が、東方約14kmの牧川が由良川に合流する地点には3基



図3 石本遺跡出土木製鞍（1）と祭裡塚古墳出土馬小像（2・3）

の横穴式石室をもつ墳長35mの前方後円墳である牧正一古墳を嚆矢とする牧古墳群（福知山市牧）があり、長者森古墳と相前後してそれらの造営が開始していることに気づく（但馬考古学研究会1994、細川2016など）。駅家に関わる遺跡はみつかっていないが、前者の付近には古代山陰道本道の郡部駅（高橋1993、谷本2004）、後者の付近には古代山陰道丹後支路の花浪駅がそれぞれ比定されており（佐藤2004、原島2013）、どちらも交通の要衝に位置することは言を俟たない。また、前者は盗掘の影響もあり、馬具の出土に恵まれないが、装飾付須恵器の一部とみられる鞍・鐙を表現した馬小像が祭裡塚古墳周辺で採集されており、後者は後続する牧弁財1号墳と続けて装飾馬具の副葬が確認され、付近に広がる同時期の集落遺跡である石本遺跡からは黒漆塗りの木製鞍橋も出土している（図3）。それぞれの地域で遅くとも当該期には家畜馬利用が一定の普及をみているとしても大過ないだろう。

はるか西方の出雲地域では、6世紀末頃に築造された上塩冶築山古墳（島根県出雲市）や東淵寺古墳（島根県松江市）が古代山陰道推定地と近接した立地をとることなどから、それらの大型墳が「当該期の広域交通路整備との緊密な関係に基づき築造された」とみられており（池淵2021:61など）、上塩冶築山古墳からも出土している鋳銅製多角形鈴については、プレ駅鈴のような機能をもっていたとする見解もある（桃崎2019）。もし6世紀末の出雲地域に「古山陰道」とでも呼ぶべき王権中枢との遠距離陸上交通路が存在したならば、但馬地域や丹波地域にも、遅くとも6世紀末には王権中枢との遠距離陸上交通路が通っていたとして何ら不思議ではない。

古代山陰道の丹波―但馬間は夜久野地域の南方に位置する遠阪峠（標高約375m）を通過していたとみられ、実際、但馬側の柴遺跡（朝来市山東町）では奈良時代～平安時代の官衙関連遺跡がみつかり、「駅子」木簡などから『延喜式』に記載される粟鹿駅に比定されている（兵庫県教育委員会2009）。ただ、上述の夜久野地域とその周辺における当該期の大型墳の築造動向に加えて、遠阪峠の両側でこの時期の卓越した規模の古墳が確認されていないこともふまえると、6世紀末に遡る「古山陰道」の存在を確かに認めてよいならば、それは、遠阪峠ではなく夜久野高原を越えるルートをとっていたとみるべきだろう（図1）。

まったく異なる水系に属し、直線距離で約28kmも離れている牧古墳群と大藪古墳群については、これまでも古墳時代後期後半に入り、それぞれの地域において突如勃興した新興勢力と目されていたが、ちょうど中間に位置する夜久野地域においても、それらとほぼ同時期に従前にはみられなかった首長墳が出現していることをふまえることによって、それぞれ周辺に古代の駅が比定されている両者を、30里（15km）間隔を基本とする古代の駅と同じような間隔で結ぶことが可能となる。ほぼ等間隔に位置する3地域における造墓活動の活発化は、丹波一但馬間においては「夜久野ルート」の開削に象徴される、遠距離陸上交通路「古山陰道」の整備と密接に関わっており、古代駅制の前史となる馬利用を基本とする新たな陸上交通の維持・管理に主体的な役割を担った地域集団の勃興を意味する可能性が極めて高い。

（2）夜久野地域における古墳の爆発的増加とその背景

時計の針を少しだけ進めよう。断片的な手がかりからみて、夜久野地域に分布する古墳の多くは長者森古墳よりも後に築造されたとみられる。今回、出土遺物の年代的位置づけが明らかとなった中夜久野（夜久野町大油子）の太田森2号墳、下夜久野の長谷古墳（夜久野町額田）、小倉田古墳（夜久野町今西中）はいずれも7世紀前半を中心とする築造年代が想定された。この頃の夜久野地域には、長者森古墳の対岸に位置し、その後継者の墓域と菱田（2013）によって目されてきた千切塚古墳群や竹ノ内古墳群以外にも、一定規模の横穴式石室墳を築造することのできる有力集団が、複数存在したことについては疑いの余地がない。太田森2号墳から出土した修理痕をもつ馬具からは、一帯における家畜馬利用の定着をうかがうことが可能であり、夜久野地域唯一の金銅装双龍環頭大刀が出土した小倉田古墳を通じて、古墳数においては上夜久野・中夜久野に比べて明らかに見劣りする下夜久野にも、王権中枢と直接的な関係をもった個人が確かに存在したことがわかる。墳丘・石室の大小や、単独墳か古墳群を形成するかなどの違いはあるが、夜久野地域における古墳築造の最盛期が7世紀前半に求められることは確かである。

全国的に群集墳が盛行するこの時期に造墓層自体の大きな拡大があったとしても、6世紀半ばの流尾古墳、長者森古墳まで古墳がほとんど築造されなかったこの地域に、その後の100年ほどで80基近い古墳が築造されるに至った背景を、単なる地域社会の内的発展だけで説明することは難しい。交通路の開削と交通拠点化に伴って、外部からそれなりの規模の移住があり、その結果として耕地開発を含めた生産力の拡大やさらなる人口増加があったと考えるのが自然であろう。

そうした移住を含めた外部地域との交流拡大によって夜久野地域にもたらされた新産業の最たるものに、中夜久野（夜久野町末・高内・日置周辺）の末窯跡群で展開した窯業生産がある。その操業開始時期が夜久野地域における古墳築造の盛行からうかがえる夜久野ルートの開削時期よりも明らかに遅れることから、如上の交通路の整備がこの地に天田郡域最大規模の須恵器生産地が展開する、直接的な基盤となった可能性は高い。なお、9世紀初頭まで操業が確認されている末窯跡群産須恵器の供給先については当該期に限らず不明な点が多いが（菱田2013、東2018）、東方の天田郡域内へは牧川一由良川による水運も利用可能であるのに対し、西方の朝来郡域や南方の氷上郡域などへは人担な

いし牛馬への駄載・車載によって山道を越える必要がある。地形的な制約を受けざるをえない交通路や流通手段は、今後、末窯跡群産須恵器の流通圏を明らかにしていく際の手がかりとなるだろう。

また、関垣4号窯（末5号窯）、同7号窯出土須恵器からみて、7世紀前半には確実に操業を始めていた末窯跡群産須恵器は、当然のことながら周辺の古墳にも供給されていた可能性が高いが、今回整理をおこなった古墳出土須恵器の中には明らかな末窯跡群産須恵器をみいだすことができなかった。夜久野地域における古墳築造のピークと末窯跡群における窯業生産の開始が、時間軸においても空間軸においてもパラレルな関係にあることが明らかとなった今、この頃にまで操業が遡る未知の窯の探索を続けると同時に、周辺の古墳や高内鎌谷遺跡や荒堀遺跡などの集落遺跡から出土している須恵器と末窯跡群産須恵器を細かく比較し、夜久野地域における須恵器の流通（消費）を通時的に復元することは、夜久野地域の古代を考える上で最も重要な基礎作業といえよう。

2. 成果と課題

最後に今回の一連の調査の成果と課題についてまとめておきたい。最大の成果は、早くに発掘され、夜久野地域を代表する古墳でありながらも、きちんとした報告書が刊行されないまま今日に至っていた長者森古墳と太田森2号墳から出土したほぼすべての遺物を同定し、今日的な水準での悉皆的な資料化を達成したことに尽きよう。出土遺物自体は現在まで町で保管され、主だったものは夜久野町化石・郷土資料館において常設展示されていたものの、保管状況には初期の段階から一部混乱が生じていた。今回の作業によって、夜久野町化石・郷土資料館にある個々の遺物をそれらが出土した古墳と紐づけて理解することが初めて可能となったとあってよく、これは長谷古墳出土遺物や夜久野ヶ原石切場附近古墳出土遺物についても同様である。それらの新資料をふまえると、夜久野地域の古墳築造は「夜久野ルート」という当時新たに設定された東西陸上交通路の出現・展開と密接に関わっていた可能性が高く、とりわけ上夜久野・中夜久野に密に分布する横穴式石室墳については、「夜久野古墳群」とでも呼ぶべき歴史的一体性をもって展開していたとみてよいだろう。

『和妙類聚抄』を初見とする「夜久郷」の由来については諸説あるようだが、その由来は今なお謎のままとなっている。山陰道丹後支路の花浪駅の「エキyekki」が転じて「ヤクyaku」となったとする説については、山陰道丹後支路のルート復元から退けられてきたが（原島2013）、地名の由来については、奈良時代以前の夜久野地域に「古山陰道」とでも呼ぶべき遠距離陸上交通路が横断し、その中央に位置する牧川中流域（夜久野高原東麓）にのちの駅にあたる交通の拠点が置かれていた可能性をふまえた上で改めて考える必要があるだろう。今回は、あくまで仮説の提示に留まったが、今後も周辺地域を含めた検討を続けていきたい。

なお長者森古墳の横穴式石室についてはSfm-MVSによる三次元計測を、千切塚古墳群・竹ノ内古墳群では測量調査を実施したほか、京都国立博物館が保管する小倉田古墳出土金銅装双龍環頭大刀に対しては、高精細写真撮影やレーザー三次元計測を含む考古学的調査を実施した。夜久野地域は開発に伴う緊急調査が少なく、古墳や窯跡をはじめとする遺跡（埋蔵文化財）が今も良好に保存されてい

るが、文化財行政の限られた予算やマンパワーの中でそれらの歴史的価値をいかに可視化し、広く発信していくかが大きな課題となっている。小倉田古墳出土金銅装双龍環頭大刀に至っては夜久野地域唯一の装飾大刀であるにもかかわらず、遠隔地で保管されていることもあって、地域住民にさえその存在が十分に認識されていない。今回、二次元的手法による従来型の資料化（実測図作成）に加えて、三次元的手法を含めた最先端の資料化を併用することで、より正確にそれらのモノの形態情報を後世に記録すると同時に、それらがもつ魅力を、実物のない場所においても、立体的かつビジュアルに伝える術が得られた。数年にわたっておこなわれてきた地道な調査の中で得られた各種データやそれらを通じて明らかになったことを、今も現地に残されている古墳や夜久野町化石・郷土資料館に展示されている遺物と紐づけ、夜久野地域の古墳のもつ歴史的重要性をいかにして多くの人々にわかりやすく伝えるか。これこそが、今後に残された最も大きな課題であろう。（諫早）

参考文献

- 東 昭吾 2018 『京都府福知山市夜久野町所在 末古窯跡群詳細調査報告書（1）』
- 池淵俊一 2021 「水利開発と地域権力：5～7世紀の出雲を素材として」『考古学研究』第68巻第3号 考古学研究会
- 諫早直人 2021 「馬匹生産地の形成と交通路」『馬と古代社会』八木書店
- 佐藤晃一 2004 「丹後国」『日本古代道路事典』八木書店
- 但馬考古学研究会（編）1994 『徹底討論 大敷古墳群 兵庫北部における大型群集墳の研究』養父町教育委員会
- 高橋美久二 1993 「古代の山陰道」『山陰道』兵庫県教育委員会
- 高松雅文 2007 「但馬の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 谷本 進 2004 「但馬国」『日本古代道路事典』八木書店
- 原島 修 2013 「古代の丹波と天田郡」『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市
- 菱田哲郎 2013 「考古資料からみた夜久野の古代」『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市
- 菱田哲郎 2020 「大型横穴式石室と交通」『横穴式石室の研究』同成社
- 兵庫県教育委員会 2009 『柴遺跡』（兵庫県文化財調査報告 第360冊）
- 広瀬和雄 2013 「終末期古墳の歴史的意義 7世紀の中央政権の地方統治」『国立歴史民俗博物館研究報告』179集
- 細川康晴 2016 「古墳時代後期の京都」『京都府埋蔵文化財論集』第7集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 前田豊邦 2006 「古墳時代」『夜久野町史』第二巻（資料編）福知山市
- 桃崎祐輔 2019 「額田部の馬具と鈴一心葉形十字文透鏡板付轡と虎頭鈴・多角形鈴をめぐって一」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター

図版出典

図1：地理院地図をもとに筆者作成

図2-1：（前田豊邦 2006）より転載

図2-2、図3-2・3：(但馬考古学研究会(編)1994)より転載

図3-1：筆者実測(福知山市夜久野町化石・郷土資料館)

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2